定年を迎える教授の特別寄稿

定年退職にあたって

岡本　健一郎

医学部
内科学講座 緩和医療学部門
（昭和大学横浜市北部病院 緩和医療科）

1980年（昭和55年）に昭和大学麻酔科学講座に入局し、細山田明義教授のもと手術麻酔に従事していましたが、翌年からペインクリニックにも関わるようになり、増田豊先生から痛みについて学びました。

2002年に細山田教授が定年退官されるにあたり、自分の進路をどうするか思案していた折りに、当時の横浜市北部病院の田口進院長、世良田和幸副院長から、痛みの専門家なので、緩和医療をやってみないかとのお誘いを受けました。2007年に北部病院麻酔科に移籍しましたが、当初は緩和ケア病棟や外来を一人で行う羽目になりました。紆余曲折がありながら、2010年に緩和医療科を立ち上げて頂き、教授に推薦して頂きました。

現在は緩和医療科医師が6人にまで増え、麻酔科、産婦人科、呼吸器内科、精神科などの出身者で幅広い視点から、緩和ケア病棟の運営管理だけではなく、緩和医療チーム活動も含め、緩和医療を行えるようになったのは感慨深いものがあります。

今でも大学に付属する緩和ケア病棟は全国で7施設しかなく、幸いにも昭和大学では早くから緩和医療の充実が図られ、昭和大学病院では2002年から緩和ケアセンターが、2018年からは昭和大学横浜市北部病院にも緩和ケアセンターができました。

昭和大学全体の緩和医療のさらなる充実を目指し、緩和ケア病棟を効率よく利用してもらえるよう、今後は昭和大学病院において微力ながら尽力していきたいと思います。

定年退職に際して

後閑　武彦

医学部 放射線医学講座
放射線医学部門
（昭和大学病院 放射線科）

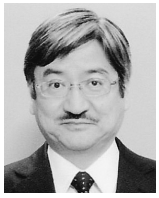
1980年（昭和55年）に昭和大学医学部を卒業し、直ちに昭和大学放射線医学講座に入局しました。私が大学を卒業した頃は放射線医学が大きく変わりつつある時代でした。頭部CTが臨床に応用されてから、わずかな間に頭部専用CT装置だけでなく全身用CT装置が日本中に普及しました。その後MRIが、瞬く間に多くの病院に導入され、CT・MRIとも日常臨床に必須の診療機器となりました。さらにIVRが腫瘍・救急・循環器・脳神経など様々な領域に広まり、今もなお発展を続けています。

核医学においてはPETが悪性腫瘍などの診療に大きなインパクトを与え、今後も分子イメージングとして重要な検査になると考えられています。また、PACSの開発により画像診断は時間的及び空間的な広がりを与えられました。例えば、日本の施設で撮影されたCTを直ちに米国で診断するということや莫大な量の画像データをサーバー内に保存する事が可能となりました。

私の専門である放射線診断学だけでも多くの進歩があり、このような時期に約40年放射線科医として働き、特に後半の14年間は教授として、その発展の中に身をおけた事は大変光栄な事であったと感じています。

昭和大学職員の皆様には長い間大変お世話になり、感謝の念に堪えません。昭和大学の益々の発展を心よりお祈念いたします。

病理診断を究める



九島　巳樹

医学部 臨床病理診断学講座
（昭和大学江東豊洲病院 臨床病理診断科）

1979年に医学部を卒業後、昭和大学大学院に入学し、第二病理学教室で人体病理とくに骨髄の病理について剖検（病理解剖）を中心に研究を進め、未脱灰標本による骨髄組織の形態学的計量的研究で学位を取得しました。大学院修了後は産婦人科領域の病理と細胞診を専門にしようと考えました。病理診断業務の中で、細胞診・組織診の検体に占める婦人科領域の検体の割合は多く、学会活動を進めるうちに日本病理学会、日本臨床細胞学会に関係した全国の病理医の協力を得て、日本婦人科病理学会の設立に関われた事（一昨年まで4年間は理事長）は、病理学教室をはじめとする昭和大学の皆様のお力添えによるものと感謝しています。

旗の台の病理学教室では医学部の大学院生に対して組織診・細胞診に関するテーマを中心に学位論文指導を行ないました。また、昭和50年代後半より薬学部から毎年、学部学生の卒業研究を受け入れ、剖検、病理診断業務に関係した研究テーマについてともに学ぶことができました。

診療面では、平成9年より基礎校舎（1号館）から昭和大学病院に重点を移して、病理学者から病理医へ転換しました。病院病理科の一員として卒前の臨床実習、卒後の研修医教育を担当できたことは、現在の江東豊洲病院臨床病理診断科でも大いに役立っています。

最後に、病理診断は臨床医、病理医ならびに検査技師のチームワークが円滑である事が不可欠で、日頃からコミュニケーションを良くして、全員が力を合わせて目標を達成していくことが大切だと思います。今後も特任教授として、微力ながら昭和大学で縁の下の力持ちになれるようがんばりますので、よろしくお願いいたします。

昭和大学での8年

加賀美　芳和

医学部 放射線医学講座
放射線治療学部門
（昭和大学病院 放射線治療科）

私は、大学病院に放射線治療科が設けられた際に誘いを受けて、2011年4月に昭和大学に異動してきました。高精度放射線治療を行える放射線治療機器リニアックが丁度新しく設置され、遠隔操作密封小線源治療装置（RALS）も導入されたところでした。やり直したい事柄は多々ありますが、色々な方々の支援もあり結果的には“大過なく”8年が経ちました。

札幌医科大学を1978年に卒業しましたが、母校での勤務経験はなく、大学生活は卒後4年目に大阪大学で1年半過ごして以来のことでした。常に厳しい評価にさらされ緊張した時間を過ごすことが多いがん専門病院での勤務が長かった私には至誠一貫を理念とし穏やかでおっとりした気風の昭和大学は全く新しい世界で、概ね居心地の良い生活を送ることができました。

昭和大学に異動してからは診療、研究に加えて学生、研修医などへの教育が大きな仕事となりました。学部5年生2～3人との水曜日午後の時間は楽しく過ごせました。また、小論文・面接委員として5年間入試にも関わりました。さらに、大学病院がん診療運営委員会委員長として全国がん登録の実態にも少し触れることができました。放射線治療の項の登録方法の矛盾に気が付き、元締めの国立がん研究センターがん登録センター長にその旨話したことが改定のきっかけになりました。

皆さまにご協力いただき放射線治療の体制も整備していただきました。放射線医学講座に放射線治療学部門の設立、各病院でも放射線治療科の設置および診療科長の配置、新規治療器の導入、医学物理士の採用、大学病院での新放射線治療棟建設等々、今後さらに発展し多くの患者さんにレベルの高い医療を提供する素地は作られました。

私は立場を変えてもう少し昭和大学にお世話になりますが、同じく8年間通常の2倍以上の働きをして私以上に消耗しているリニアックはまだ後継者が決まらず、リタイアさせてあげられなかったことは心残りです。

大学入学47年後の卒業にあたって

倉田　なおみ

薬学部 社会健康薬学講座
社会薬学部門

1976年昭和大学薬学部に入学、フィギュアスケート部に打ち込んだ学生生活の後、大学病院薬剤部20年、藤が丘リハビリテーション病院薬局10年、薬学部教員13年を経て、この度、昭和大学を卒業することになりました。

大学病院では1日1000枚の外来処方箋調剤に追われながら、病棟業務にて患者さんから多くのことを学びました。恐ろしさを知らない時期であり、手書きの薬袋、処方箋をなくすために医事入力を利用した出力システムを1から構築しましたが、今になって無事運用できたことに安堵しております。

リハビリ病院では薬局長として全病棟へ薬剤師を配置、「薬が体に入るまでを確認すること」を一言で表すために今では当たり前に言われていますが“服薬支援”という言葉を考えて使い始めました。

その後薬学部に赴任し学生教育のみならず、学内機能評価にて全病院の質向上に携わることができました。現薬学部長の中村明弘先生に薬剤学部門に呼んでいただき、処方薬を基礎の立場から教えるようになってその重要性を再認識しました。

リハビリ病院時代に開発した新しい経管投薬法である“簡易懸濁法”を薬剤学の観点から見直し、薬剤学の知識の臨床応用を学生のみならず全国の薬剤師に伝えてきました。臨床薬剤師が薬剤学を臨床現場で活用してくれたことにより、簡易懸濁法が全国に普及したのかもしれません。

また、木内祐二先生のもとで学部連携のPBLチュートリアル、病棟実習、地域医療実習の構築にも関わらせていただき、他学部の先生方と連携できたことも私の財産です。

47年間の昭和大学生活は、時々の異なる目標に追われているうちに過ぎてしまいました。その間にお世話になった方は数え切れず、その皆様のおかげで卒業の日を迎えることができました。皆様には感謝の気持ちで一杯です。

医学堂書店
品川区
旗の台
電話(03)
3783-9774